

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「留学先で通じない」生徒の一言から、「英語を話す」授業を追究

佐賀県立鳥栖高校 山口 司 先生 37歳

私が乗り越えてきたもの

英語での問い掛けに戸惑う生徒たち

「生徒に生きた英語を教えたい」。新採の教師として進学校に赴任した時、私は強くそう思っていました。大学時代、留学先で英語が通じず、悔しい思いをした経験があったからです。そのため、授業は、導入と内容理解に必要な説明を英語で行いました。ところが、私の英語での問い掛けに答えるのは成績上位層の生徒ばかり。多くの生徒は考え込んで困った顔をしていました。

既習の表現を用いるなど、発問を工夫して生徒が答えやすくなるよう配慮しましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。ヒントを多く出せば、

その分授業進度が遅れ、日本語での説明も不十分になってしまい、「分かった」という実感を生徒に持たせられなかったのです。どの生徒にも分かりやすい授業をしようと、私は次第に日本語での説明を重視するようになりました。自分のしたい授業ではなかったものの、進学校の教師として、生徒が希望進路を実現できる力を育むことを最優先すべきだと思ったのです。

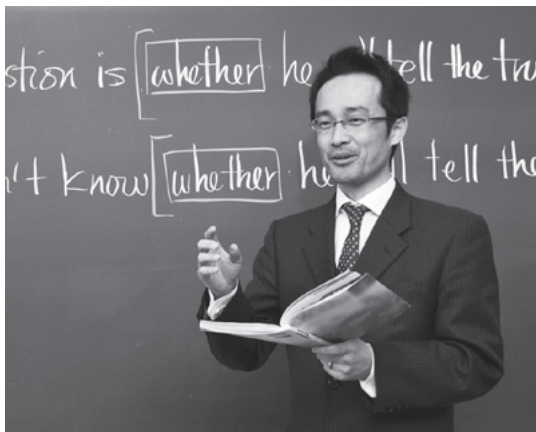
自分と同じ思いをさせてしまった

私は、英文の内容を日本語でしっかりと説明し、自分の経験を題材にした例

文を作って重要構文を解説するなど、入試で問われることを分かりやすく伝える工夫を重ねました。英語史や文法の変遷なども話し、生徒の知的好奇心を刺激しようとしました。その結果、生徒の表情には英語を学ぶ楽しさが表れてきました。更に、自分の教えた生徒の多くが志望大に合格し、私は指導に自信が持てるようになったのです。

しかし、私に会いに来た卒業生の一言で、私は自分の至らなさを痛感することになりました。その卒業生は、私にこう言いました。「先生の授業で大学には合格できたけれど、入学後に留学した先では、英語が全く通じなかった」と。私は、かつての自分と同じ思いを、生徒にさせてしまっていたのです。

英語を使った授業に生徒を引き込めなかった



やまぐち・つかさ ◎教職歴14年。同校に赴任して2年目。担当教科は英語。2学年担任。
佐賀県立鳥栖高校 ◎全日制・定時制／普通科／共学。11年度入試では、国公立大は東京農工大、大阪大、広島大、九州大、佐賀大、長崎大などに78人が合格。私立大は明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ325人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

全員が英語を使えるようになるために

卒業後も通用する英語力の土台を育む使命が、高校教師にはある。そのことに改めて気付いた私は、初心に帰り、生徒が英語を話す時間を増やそうと思いました。ただ、以前のような英語による授業に切り替えただけでは、下位層の生徒は戸惑うはず。誰もが英語を口にするようになるには何かを考えました。音読が見えてきました。

私は毎回、生徒に授業で扱った英文を声に出して読ませることにしました。授業中に5回は音読できるように授業を組み立て直したのです。音読の時間を確保すると、日本語で説明する

時間と量は限られてきます。しかし、「生徒が家庭で一人でも出来ること」と「教室で皆と一緒に出来ること」を整理してみると、私のそれまで行っていた日本語での説明の多くは、工夫すれば生徒各自の学習に委ねられると思ひ、音読の時間を優先したのです。

生徒には、音読は英語の4技能全てに効果があること、自分も毎日音読していることを伝えました。音読の必要性をしっかりと伝えたことで、彼らは納得して音読に取り組んでくれました。音読を続けた結果、生徒は前後の文脈を意識し、英語として自然な区切りを付けて話せるようになりました。効果は読解にも表れました。英文を音声

として捉えることで、英文のまま意味をつかめる生徒が増えたのです。

効果的な音読を目指して

教職13年目で赴任した鳥栖高校では、最初から授業に音読を取り入れました。生徒は積極的に取り組んでくれましたが、その音読を聞くと、英文の内容を理解していないと感じました。

音読は、内容を把握した文章で行ってこそ役立ちます。しかし、私は生徒に予習を徹底させることが出来ていなかったため、生徒は効果的な音読を行えていなかったのです。「これでは生徒に英語力を付けさせられないし、音読の効果も上がらない」。そう思った私は、新出単語などを書かせるプリン

「英語を話したい」という生徒の思いに応える指導を

トを用意しました。予習をすれば授業が分かりやすくなると、生徒は感じたでしょう。徐々にプリントに取り組んでくる生徒が増え、効果的な音読も出来るようになりました。

最近解説のペースを速め、音読に加えて英語でのペアワークを行う時間もつくっています。生徒には以前より負担があるはずですが、その表情は生き生きとしています。全員が英語を話すことを、そして使える英語表現が増えていくことを、喜んでいるように見えます。英語が話せるようになりたいという思いは、どの生徒も持っているはず。その気持ちを引き出し、それに応えられる指導を、今後も追究していきたいと思ひます。

山口先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒が英文の意味を理解した上で音読できるよう、どのような工夫をしていますか？

A 予習用プリントと復習用プリントを作成・配布しています。予習用プリントでは、新出の単語や熟語の意味を書かせます。逆に、意味を載せ、つづりを書かせることもあります。大学入試の長文読解に頻出のものは意味を、英作文に頻出のものはつづりを書かせます。新出の構文がある場合、その構文についての語句の並べ替え問題を2~3問設けています。

復習用プリントは、授業で前回の学習内容を振り返る時間を減らす上でも有効です。単語の意味やつづりを問う定着のための問題だけでなく、授業で扱った表現を使って作文させるなど、活用のための問題も載せ、その日のうちに解くよう指導しています。復習用プリントは単元ごとに回収し、不正解が多い生徒には個別指導を行っています。

Q 生徒に英語を話させるために、音読以外に授業にどのような活動を取り入れていますか？

A 生徒が2人1組になり、英語を使って問答をするペアワークを取り入れています。具体的には、じゃんけんで勝った生徒が新出の単語や熟語の意味を問い、負けた生徒が英語で答えたり、一方の生徒が筆者の意見を英語で説明し、もう一方の生徒がそれに対する自分の意見を英語で言ったりします。問答が日本語になることもありますが、それでも、他者に意味を説明することで英語や英文の理解が深まるため、知識を定着させられると考えています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す山口司先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、山口先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp